

# 白選五十一首

こそめづき つばめさりづき かりくづき  
木染月・燕去月・雁来月 ことばなく人をゆかしめし秋

きみが手の触れしばかりにほどけたる髪のみならずかの夜よりは

追憶のもつとも明るきひとつにてま夏弟のドルフィンキック

もろともに秋の滑車に汲みあぐるよきことばよきむかしの月夜つくよ

悪友と呼ぶいちにんをおしなべて好みて持てり男は誰も

負けたくはなしなけれども樹に登りこの世見おろしたることもなし

だまし絵に騙されてゐるいつときが思ひのほかの今日のしあはせ

まぎれなき冬の夜の風くだり来ぬ酔うてさみしき男となるな

にんげんにこよなく近き歴史にて木にも肌あり力瘤あり

三鬼にもきみにも遠き恋ありてしのばゆ夜の桃甘ければ

珊瑚樹のとびきり紅き秋なりきほんたうによいかと問はれてゐたり

〔花絆〕

〔星刈り〕

〔世紀末の桃〕



今野寿美

(Imano)

十七歳になったばかりの息子が、おりおり否定語のかわりに「ぬ」とだけ答えてすました顔をする。「おぼえてる？」と聞くと、「おぼえてぬっ」と応じ、「ある？」と聞く。「ぬっ」という具合。小学校六年のころからだから、「あらぬ」の省略のつもり、などという知識はなかったはずである。どこかで耳に残った言い回しから「ぬ」に否定的なニュアンスを嗅ぎ取って、勝手に流行したのかも知れない。外では言わないようだし、たしなめるほどのことでもない、と思っているうちに息子とわたしの間でなんとなく定着してしまった。なぜか父親に向けてはあまり言わないようだ。わたしが内心おもしろがっていることが伝わったのだろうか。

ゆふぐれの鶴はをみなにて胸さむし胸さむければひと恋ふならむ  
やはらかに文語の季節去りにけり花見むとしてわれは目を閉づ  
みどりごはふと生れ出でてあるときは置きどころなきゆる抱きるたり

水無月の光を曳きて雨は降る水から生まれしものたちのため  
若夏の水がにほへばわたすげの風にしがふころゆかしも

忘れねばしたたるやうに杳き名のいちごいちびこ梨はありのみ  
うくすつぬ童子唱へてえかせてね今日の終はりの湯の音のなか

王禪寺に仰ぎてをれば青柿が念力ゆるみたるごと落ちぬ

夏ゆけばいつさい棄てよ忘れよといきなり花になる曼珠沙華

忘れれてすすきかるかや竹つごとき閑吟集の真名序と仮名序

秋の空きりきりたかしかがやかに黄をまとひゆく雄の木雌の木は  
わたくしの時間にふとも風たちてかつこんかつこん子が帰ってくる

童子うらうら昔をかへすうひ学びあな誇らしき墨痕「上下」

覆ふことわけもなくしてけづり氷とふさやかなるもの天は降らする

鶏頭はなほ炎ゆれども人寄ればかほどに分かるる歌のよしあし

龍四つ並べて六十四画のテツなる漢字は子に教へらる

声悪しき鷺は鳴かずにやや歩みややふくらみてただにうつくし

鳥の目はまどかなれどもものいはずいくいと見て見ぬふりをする

天と地と水とあやめもわかたぬを鳥は湧くものふと消ゆるもの  
あを鷺の首やせやせて吞まむとすなべてこの世のかたちのままに

〔若夏記〕

妙な言葉遣いをおもしろがるなんて元国語教師としても気がとがめるが、ことば以前の音のひとつにも、子どもの察知する意味はけっこうまともらしい、ということが捨てがたかったのだと思う。音の響きを含め、ことばのどこか混沌とした部分がふと引き寄せられる瞬間といたらいいだろうか。そんな一瞬へとわたしの思いはゆく。

〔鳥彦〕

やはり息子のことになるが、少年というのは登下校の際にも少女たちのようにお喋りだけではすまないらしい。あちこちに關心が飛び、道筋の家の飼い犬を必ずからかい、何か落ちていればかがみこみ、やたらとズボンのポケットをふくらませ、手にしているものは振り回す。わたしが家で机に向かっていると、遠くから息子の声が聞こえる。丘の細道を数人でわいわいと帰ってくる姿が、斜面いっぱい梅の木の間に見え、斜面で見ると、遠くから息子の声が聞こえてくる。家の玄関に走り込んで来るまでが長い。いったい何をしているかと思うくらい時間を、彼らは目一杯楽しみ、成長しているらしい。「かつこんかつこん子が帰ってくる」という下の句が、擬音語とも擬態語ともつかないままに浮かんた。これまた、ことば以前のこともしれない。

海は海どんみり重き東京の沖のかもめがそれでも鳴いて

この道は海につづくと聞きたれば海に断たるまでのひとすぢ  
堅香子は群れねばさみし群れてなほさみしかりけり秘密の丘に  
おぼえてぬつ好きではぬつ時間がぬつぬつぬつと子は会話する  
体育のミヤキン、イノハク幾何チャピン代数スパケン由来は秘密  
かなかなをひとりと言ひて三人の食卓にふととどく夕闇

昔たしかにありし言葉のはかなさの〈風焼け〉とふを空は忘れて  
さんざんとざんと夏きぬひよどりが蟬くはへ翔ぶ空をとがむな  
友どちは十三歳のただなかの少年みんなつるんと真面目

騎馬戦のわが子の一騎はまだ無事でひたすら逃げる逃げよと思ふ

それはまあ無理といふものこんなにも小さいわたしが産んだ子だもの

「め・じ・か」以後

足名権手名権もとより一対の老いびと千年万年老いびと

ほんたうに喜ぶ顔が見たいなら一度鳴いてよイカルのやうに

細身なる鮎に鱭ありつい焦がす胸の位置なりせつなかりけり

ぼぼといふ眠くなる音ひと好み空に地上にぼぼあふれしむ

啄木はそして啄木居士となり四月よく降る 都の雨が

雪むかへ 雪虫 雪ん子 雪婆はんご 知らざれば聴く天そらの充足

熊蟬がしやぎしやぎしやぎとおしつむ忘れじとして忘れゆく夏

とことにはウランは少女の名であればあな青白き光不意打ち